



13

ことばで気もちがかわる

今日は、北九州市戸畑区の小学二年生、前島見春さんの作文を紹介します。本人の朗読でお聴きください。

『ことばで気もちがかわる』

北九州市立一校小学校二年 前島 見春

気もちの伝え方のべんきょうをしました。

ボールをかしてほしいという気もちはいっしょだけど、言い方によつてあいての気もちがちがうことを知りました。あたたかい気もちにもなるし、いやな気もちにもなります。もし、つよくらんぼうなことばをつかうと聞いた人は、心の中がもやもやしてへんじができません。どんどんへんじができなくなって、おしゃべりもできなくて、さびしくてつらい気もちになってしまつと思ひました。言いたいことが言えないと、くやしい気もちになります。だから、わたしは、自分の思っていることばをはっきり伝えたいです。そのときは、あいての心があたたまることばをつかうと思ひます。おたがいの心がすっきりするからです。

自分と友だちの気もちを思いやる心を持ちます。そして、ことばを大じにつかおつと思ひます。

いかがでしたか。

言葉の意味は同じでも、伝え方が違えば、受け取る側の気持ちも違うということを学んだ作者。

例えば、「ボール、貸してよ!」と強い伝え方をされると、「ボール、貸してもらえる?」と優しく伝えられるのでは、心の感じ方が違います。

強く乱暴な言葉を向けられると、傷ついて悲しくなるだけではありません。もやもやしたり、つらくなったりして、言いたいことが言えなくなつて、悔しくもなる。自分の思いだけを一方的に話すと、相手は困つてしまい、その人はうまく気持ちを伝えられなくなることがあります。

気持ちを伝えるためには、相手がどう感じるかを想像して、受け止めやすい言葉を選んだり、雰囲気をつくったり。どうすればお互いにとって心地よいやりとりが生まれるのか。作者は、「相手の心が温まる言葉を使いたい」と作文を結びました。

言葉は、伝え方次第で、人の心を閉ざすことも、開くこともできるものです。自分の気持ちを大切にしながら、相手のことを思いやる。そんな言葉の伝え方を、私たちも日頃から心掛けたいですね。では、また。

